第３回　仙台市総合計画審議会議事録

日　　時　　平成 31 年１月 31 日（木）　18：00～20：30
会　　場　　仙台市役所２階　第一委員会室
出席委員　　阿部一彦委員、阿部重樹委員、飯島淳子委員、岩間友希委員、姥浦道生委員、遠藤耕太委員、遠藤智栄委員、奥村誠委員、小野寺健委員、折腹実己子委員、柿沼敏万委員、鎌田城行委員、菊地崇良委員、小岩孝子委員、今里織委員、今野薫委員、榊原進委員、佐々木綾子委員、佐藤静委員、庄子真岐委員、菅井茂委員、竹川隆司委員、舘田あゆみ委員、中坪千代委員、浜知美委員、舟引敏明委員、やしろ美香委員、渡邉浩文委員　［28 名］
欠席委員　　今野彩子委員、永井幸夫委員　［２名］
仙　台　市　　福田まちづくり政策局長、梅内まちづくり政策局次長、
（事務局）　　細井政策企画部長、松田政策企画課長、柳沢政策企画課主幹
議　　事　　１　開会
　　２　議事
　　(1) 市民参画事業について
　　(2) 都市像と施策の方向性について
　　(3) その他
　　３　閉会
配付資料　　１－１　みんなのせんだい未来づくり報告書
　　１－２　みんなのせんだい未来づくり市民意見一覧
　　２　　区民参画イベントの実施概要
　　３　　まちづくりを進めるうえで大切にしたい価値観（仙台らしさ・仙台の強み）と重点的な取り組みの視点
　　４　　第２回仙台市総合計画審議会　意見整理表

１　開会

○奥村誠会長

ただいまから「第３回仙台市総合計画審議会」を開会いたします。

議事に入る前に定足数等の確認を行いますので、事務局から報告をお願いします。

○細井政策企画部長

本日ただいま 26 名の委員にご出席いただいております。

遅れて２名の委員の方がご出席と聞いております。２名の委員の方はご欠席でございます。

定数を満たしておることをご報告します。

○奥村誠会長

はい。承知しました。次に会議の公開、非公開の扱いですけれども、前回と同様に公開

といたしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

（了承）

○奥村誠会長

はい。それでは、公開とします。

続いて、本日の議事録署名委員の指名ですが、前回は阿部重樹委員さんにお願いしましたので、今回は名簿順ということで飯島委員さんにお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

事務局より資料等の確認をお願いします。

○細井政策企画部長

お手元に座席表、次第、それから資料一覧、資料１－１から１－２、そして資料２から資料４と、併せて前回までの資料ファイルを置いております。ご確認の方よろしくお願いいたします。

２　議事

（１）市民参画事業について

○奥村誠会長

それでは、早速ですけれども、議事に入りたいと思います。次第を見ていただきますと、今日の議事の第１は「市民参画事業について」となっております。事務局から報告があるとのことです。説明をよろしくお願いします。

○松田政策企画課長

それではご説明申し上げます。まず資料１－１と資料１－２について併せてご説明します。こちらは総合計画策定のキックオフイベントとして昨年 11 月 25 日に行いました「みんなのせんだい未来づくり」の報告書と、資料１－２はいただいたご意見すべてをまとめたものとなっております。

当日は、「私が考える 30 年後の仙台の未来の姿」、そして「その未来を実現するために自分たちがアクションしたいこと」の２つをテーマに、17 歳から 83 歳までの 118 人からご意見をいただきました。資料１－１の７ページから当日出された意見を分類させていただいております。８ページをご覧いただきたいのですが、大分類は、今、この会議で出されている都市像、仙台市の強み、「学び」、「共生」、「環境」、「活力」等々出されていますが、それごとに関連するものとして意見を分類し、載せさせていただいております。大分類で集計しますと、ご覧の通り「共生（多様性）」に関するご意見が最も多く、次いで「活力」「学び」「環境」の順でございました。９ページ以降に代表的な意見を抜粋して、お示ししております。

詳細は省略させていただきますが、「学び」「環境」「活力」の分野では、それぞれの仙台の強み、若者や学生、また、「環境」においては「杜の都」、そして「活力」では「東北

の拠点」などに着目をして、これを生かした前向きな未来の仙台の姿へのご意見が多々出されたところでございます。

また、11 ページ以降は「自分たちがその実現のためにアクションしたいこと」について出されたご意見をまとめております。詳細につきましては、資料１－２と併せて後ほどご高覧をいただきたいと思います。

続きまして、資料２になります。こちらは総合計画の中の区別計画の策定に向けまして、これから２月 17 日を皮切りに区ごとに行います区民参画イベントの実施概要となっております。先ほどの全市的イベントと同様で、区の魅力であるとか、区の未来の姿について区民の方々と話し合い、ご意見をいただくようなイベントとなっております。後ろの方に５区それぞれで作成しましたチラシを掲載しております。いただきましたご意見は報告としてまとめまして、この審議会の中で正式にご報告してまいりたいと思います。

○奥村誠会長

はい。ありがとうございました。それでは、今の説明についてご質問等ありましたら、どうでしょうか。よろしいですか。

これまで、この審議会でも、行政だけではなく、市民とか町内会とかＮＰＯとか、あるいは企業、大学等とか、いろいろな主体の連携が重要であって、それからこの計画を策定するという段階でも市民の参画が重要だというご意見をいただいております。この後、新総合計画の内容はこの審議会で議論して、答申まで持っていくわけですけれども、まず市民の皆さんに関心を持っていただいて、内容について知っていただく。しかも、決まった後に市民の方に行動していただくというような形に向けて、意識を高めていただかないといけないので、こうした取り組みを続けていただきたいと考えております。

（２）都市像と施策の方向性について

○奥村誠会長

それでは、議事の第２「都市像と施策の方向性について」に移ります。

前回、委員の皆さまから限られた時間ではありましたけれども、さまざまな分野、視点から、それから私が言いました「掛け算で」という考えも汲んでいただきまして、仙台の強み、あるいは仙台らしさ、あるいは取り組みの方向について、さまざまご示唆いただいております。

それらを事務局の方で整理をいたしまして、新たな観点も入れながら前回の審議会でお示ししましたワークシート、前回は「ここに空きがありますよ」とお示ししましたが、その内容をブラッシュアップしていただいたところです。

事務局から資料の説明をしていただいた後で、本日は委員同士で意見交換をしていきたいと思います。説明をお願いします。

○松田政策企画課長

それでは資料３をご覧ください。こちらはただいま会長からお話がありましたように前回までの審議会において委員の皆さまから出していただきましたご意見をまとめたもの

でございます。

左側に「まちづくりを進める上で大切にしたい価値観（仙台らしさ、強み)」、そして中央に「重点的な取り組みの視点」、そしてこれらを検討するための「キーワード」を右側にお示ししております。朱書きになっている部分については、前回ワークシートという形で取りあえずワードを散りばめていたのですが、それに対してご意見をいただき、こちらで加筆や修正をしたところを朱書きという形でお示ししております。

また、中央の「重点的な取り組みの視点」につきましては、前回のワークシートではここは空欄になっておりました。

前回のご意見等を踏まえまして、【地学連携～地域で学び合う～】から【働く場所として選ばれる環境づくり～仙台で働く～】までの６つの項目に、事務局の方でいったんまとめさせていただきました。それぞれの項目につきましては、こうであったら良いというような「未来の状況」と、それに向けた「施策形成の視点」、この２つをまとめさせていただいております。本日は、こちらが検討の資料、土台となるものと考えております。

そして、資料４は第２回審議会で出していただきました意見整理表になっております。当日だけではなく、会の終了後に追加でご意見をメール等でいただいた方もいらっしゃいますので、その方のご意見も載せさせていただいております。ご意見の内容につきましては、都市像であるとか、２ページ目をめくっていただきますと、どの分野に関連するご意見なのか、こちらで分類をさせていただきまして、掲載させていただいております。このご意見を踏まえまして、先ほどの資料３を作成したところでございます。

なお、資料４につきましては、後日追加でいただきましたご意見は、例えば、２ページ目の「学び（学都)」のところで４つ目の〇の中坪委員の意見になりますけれども、「子どもも大人も『育て方』『学び方』『働き方』の基盤となる部分で歩幅を整え、改革していくことが重要」というようなご意見をいただきました。このご意見については、（追加）という形で分かるようにお示ししております。ほかにも追加でいただきました方のご意見は、このようにお示しをさせていただいておるところでございます。

〇奥村誠会長

今のご説明について、質問がありましたら。よろしいでしょうか。中身はこれから議論しますので、よろしいですね。

では、これから委員同士の意見交換を行っていきたいと思います。先ほどの資料３、皆さんの意見に基づいて作りました「重点的な取り組みの視点」という資料を中心に、抜けている視点がないかの確認であるとか、あるいは最初からお話ししていますけれども、具体的な皆さんの取り組みや経験の中からやはりこういうものが重要だということもあると思いますので、実施主体、ターゲットなどについてのご意見もいただきながら、イメージを固め、具体的なイメージを皆で持てるような形で議論したいと思います。

今日はここまで滞りなくきました。時間は 20 時半までいただいておりますので、２時間 15 分あります。前回よりも発言時間を確保できると思いますけれども、この人数ですので話し始めると、あっという間に時間が経つと思います。始めの方で全部使ってしまうと最後まで行かないので、全体を３つに分けさせていただきます。

資料３の真ん中のところを見ていただきますと、６つプラス最後に【横断的な事項】とあり、６つが頭出しされています。このうちの初めの３つ【地学連携】【多様性が活きる社会の実現】【地域コミュニティ強化】を最初の 45 分ぐらいで議論させていただきます。次の 45 分間で、残りの３つ【世界に輝く杜の都の深化】から【都心再構築】【働く場所として選ばれる環境づくり】まで議論させていただきます。なお、その話をする時に左側の「都市像」であるとか、「大切にしたい価値観」、色の付いているところですが、こちらに関することや一番下に書いてある【横断的事項】に関する意見につきましては、これらと関係して議論した方がいいということですので、いずれのパートでご発言いただく時にも併せてご意見をいただいて結構かと思います。最後に 30 分残ると思いますので、（６つに関する）取り組みの個別のものを受けて、もう一度左側の「価値観」のところについて意見交換をしたいと思います。45 分間で上３つ、次の 45 分で下３つ、最後の 30 分で左側を含めてということになります。

前回はあいうえお順で一通りということでしたが、今回はご意見を出したい方に手を挙げていただいて、お話をいただくということにしたいと思います。

ただし、全体の時間が限られているのは同じです。多くの方からご意見を伺いたいという趣旨がありますので、簡潔なご発言にご協力いただき、最大２分ぐらいでご発言は切っていただくようお願いしたいと思います。

それでは、最初の部分の議論、【地学連携】から【地域コミュニティ】のところまで、３つに関しておおむね 19 時過ぎまで意見交換できるかと思います。ご意見のある方、挙手をいただいてお願いしたいと思います。どうでしょうか。

はい。佐藤静委員さん。

○佐藤静委員

これはたぶん【地域コミュニティ強化～仙台で暮らす～】に関わることかと思いますが、仙台市の役割、あるいは仙台市の使命として、「心と命を守る」ということを明記する必要があるように思いますので、ご検討ください。

○奥村誠会長

遠藤智栄委員さん。

○遠藤智栄委員

「～仙台で暮らす～」の「未来の状況」のところは、もう少し積極的な言葉の方がいいかなと思いました。「多様な主体が関わり合うこと」のところを「関わり協働すること」に、積極的に「受け入れる」ではなく「実行」とか「実践する」に。

もう１つ、「～地域で学び合う～」のところも言葉を積極的にして、「各主体がつながり実践する場づくり」、そして、「企業」の前に「ＮＰＯ」というのも入れていただけたらと思います。

後は、「～仙台で暮らす～」と「～仙台を世界に伝える～」の両方にかかると思うのですけれども、「快適」とか「心地よい都市」が、いろいろな方から選ばれて、住むことに

つながっていると思いますので、どちらに入ったらいいのか分かりませんが、そう感じました。

○奥村誠会長

阿部一彦委員さん。

○阿部一彦委員

「重点的な取り組みの視点」のところ、「～地域で学び合う～」ことは大事だと思います。それと、右側の「キーワード」では「生涯教育」が④にありますし、また、左側の「大切にしたい価値観」の方にも「生涯学習」「環境」とありますので、この真ん中の「重点的な取り組みの視点」のところにも「生涯学習」というような文面があるといいと思いました。市民、高齢の人、障害のある人もいつまでも学ぶことができるというような意味で。両側に書いてあるのであれば、真ん中の「重点的な取り組みの視点」にもしっかり書いた方がいいと思いました。

それから【多様性が活きる社会の実現】のところに「東京オリパラを契機とした取り組み」とありますけれども、これも具体的に。「オリパラのレガシー」ってありますし、ユニバーサルデザイン 2020 行動計画では、ここからはみ出る部分もあるかも知れませんけれども、「心のバリアフリー」というところで先ほどの佐藤委員と共通するところもあるのかなと思いました。それから、「ユニバーサルデザインのまちづくり」は下の方に入るのかもしれませんけれども。

オリパラのレガシー、私はユニバーサルデザイン 2020 行動計画の評価委員なんですけれども、東京だけではなくて、是非私たちの地元仙台でも、それを遺産として継続していくという視点があると嬉しいなと思いました。

○奥村誠会長

小野寺委員さん。

○小野寺健委員

このペーパーの中身を指摘すればいいのか、分からないところがあるのですが、人口減少について少し話をさせていただきたいと思います。

全国的な問題であって、仙台市だけが将来にわたって人口を維持するのが困難だと思うのですが、他都市よりも人口減少がちょっと緩やかで、年代構成のバランスの取れた、就業人口や交流人口も多い魅力的な活力ある仙台を築くという視点があって欲しいと思うのですが、この３つの中のどこに入るのか難しいところがあります。人口減少と書いてあるからここで話していいのかという状況で話しております。

そのためには、「市民、団体、企業などの主体と行政との連携強化」とか、「未来のまちづくりを担う人材の育成」というものを積極的に取り組んでいただきたいと思うのですけど、それをどこへ入れていいのかという部分もあり、話しづらくて困っています。フリートークでいいですか。

○奥村誠会長

ここ（資料３の「重点的な取り組み視点」の上３つ）に合わせてということですね。

○小野寺健委員

ということですと、人口減少についてはそのようなところで。

基本的に、住んで、働く場とか、住んでいて魅力的だということもあって仙台が選ばれる、住んでいる人、ほかの都市の人からも含めて仙台が選ばれるような状況、環境をつくっていくことが【地域コミュニティ強化】に入るのかなと思いながらも、なかなか難しくて、まとまらなくて困っていました。

○奥村誠会長

たぶん、次のところの一番下の【働く場所として選ばれる】に結構近いのかも知れません。働かずに選ばれてもいいんですけれども。ありがとうございました。

そのほかどうですか。小岩委員さん。

○小岩孝子委員

真ん中の「～ともに活きる～」のところ、「キーワード」で言うと②③④の辺りかと思いますが、「③子育て・教育」のところに「時代に沿った学校教育のあり方」と書いてありますが、学校教育だけでなく、生涯学習の視点も取り入れるべきかと思います。

生涯学習の中の３つの教育というと、家庭教育、学校教育、それから社会教育が挙げられます。今、仙台では、いじめとかいじめによる死とかが問題になっている中で、学校教育だけに責任があることを言われていますけれども、私は地域の一人として学校の中にも関わっていますが、学校は「学校が地域と共に、地域が学校と共に」を念頭に、子どもたち一人一人を尊重しながら実践しようとしていると思います。様々な原因要素があるかと思いますが、学校教育だけじゃなくて、家庭教育の部分もかなり大きいと思っています。

児童館運営もしていますが、親と話していると、ちょっと違うと思うことが多々あり、今日も保育所に行って、新しく入る子どものことを相談してきたのですが、やはり保育所の先生方も、そういうことを少し感じているところもあって、３つの教育の積み重ねのあり方を仙台から発信していけないかなと私は思っております。

いろいろな人と出会うことによって子どもたちが育っていく、そういう未来を築くために家庭教育のあり方を伝えることがどうしても必要かなと思っていますので、何とかそういうことを学ぶ場所や、家庭教育、学校教育、社会教育が功を奏する仕組みづくりがこれからの 10 年間に必要かなと思っています。

○奥村誠会長

柿沼委員さん。

○柿沼敏万委員

ただいまの話に関連するのですけれども、「キーワード」③に「時代に沿った学校教育のあり方」ということを引き出していますが、私は果たしてこの文言でいいのかなと。少なくとも学校教育は、その検証、評価に数十年かけなければ、実態が分かりません。ましてや「時代に沿って」となると、どの時代を指しているのかということになります。私も「時代に沿った学校教育のあり方」という文言は、今、お話がありましたように、家庭教育、社会教育、あるいは生涯学習等々をミックスしたような表現にするのならいいと思います。

「時代に沿った学校教育のあり方」ということで切ると、学校教育の本来の姿をどういうふうに見るかということになると思いますので、そこのところは一考を要するのではないのかなと思っています。

○奥村誠会長

折腹副会長さん。

○折腹実己子副会長

真ん中の【地域コミュニティ強化～仙台で暮らす～】のところですけれども、その地域の中での活動の場づくりとか、活動を支援する何か、地域の中での活動を積極的に行うような支援策がないとなかなか活きてこないかなと思います。

右側の「④生涯学習」のところでも、上の「①地域生活支援」とは別に、特に高齢になった方々がそれぞれの交流促進もありますが、地域の中で活動する、活動に積極的に関わることができる場づくりや活動支援があると、介護予防にもつながりますし、積極的な地域活動が健康寿命にも反映されると思いますので、そういった文言が入るといいかなと感じました。

○奥村誠会長

舘田委員さん。

○舘田あゆみ委員

私、横断的なところにＩＣＴのことを前回発言しましたけれども、ＩＣＴというのはやめにして、テクノロジーという言葉に変えていただきたい、ＩＣＴという言葉がだんだん流行らなくなってくる可能性があるなと思っています。

それで、誰にでも優しい、テクノロジーが誰でも身近に感じられるにようにという意味で、経済活動とか、イノベーションとか、生産性向上のところだけではなくて、「～ともに活きる～」とか、「～仙台で暮らす～」という辺りの「場づくり」とか「環境づくり」と書いてあるところに、「テクノロジーを積極的に活用した場づくり」とか、そんなふうにしていただくと、技術者の人たちもビジネス観点だけではなくて暮らしていくところに自分たちはもっと積極的に関わろうという気持ちになるといいなという意味で、そういう文言を入れていただいてもいいかなと思いました。

○奥村誠会長
鎌田委員さん。

○鎌田城行委員
よくまとめられている中で、１つ１つ見るとどうしてもちょっと引っかかるところがあるものですから、確認させていただきたいと思います。例えば、２番目のところの【多様性が活きる社会の実現】に関して、「未来の状況」の冒頭で「自分を相手に伝える、相手も受け止めより良い関係を能動的につくることができる」という部分に対しては、自分が主張することも大事なんでしょうけども、他者をおもんばかるという社会づくりをしていかないと、多様性を認めることにはならないのではないかというのがどうしてもひっかかります。ここは皆さまのご意見を賜りたいなと思っておりました。
もう１つが【地域コミュニティ強化】の中の「未来の状況」を示す冒頭の部分、「最も基礎的な地域団体の単位である町内会を中心に」とおっしゃるんですが、町内会と言っても地域によってはこれからの地域をつくろうとされる壮年というか実年の方々が主体となっている地域もあれば、これまで社会で十分力を果たしてきた方々がいよいよ町内で貢献しようと言って、世代の高い状況にありながらもさらに頑張ろうと構えていただいている方もいらっしゃる。この辺りのところで言う、「町内会を主体に」というところの町内会そのものが、地域でさまざま異なるものですから、どの辺りを想像してこのことを進めようとされるのか。また、地域だけでは頼れない現状が、今、生じているところを「町内会を主体に」と謳ってしまっていいのかどうか。この辺りについては、皆さまのご意見を聞いておきたいと思います。

○奥村誠会長
問題提起がありました。今のことと関連して…。菅井委員さん。

○菅井茂委員
今、仙台市の町内会加入率は 79.6 パーセントです。これはやはり基礎的な団体だと思います。それをここで使ってもらったということは、逆に言うと、仙台市が町内会をこれからも大切にして取り組んでいく、特に今問題になっているマンション等が入っていないことですが、そういうところも一緒になって取り組んだらいいのではないかというアピールだと思いますので、私はこれでいい、よく書いていただいたなというふうに思っています。
そういう点で、先ほどお話があったのですが、やはり皆が最低限度入ってもらえるところがここだろうと思います。そういう実態を踏まえての表現だと私は捉えて、大賛成だなと思っていました。

○奥村誠会長
柿沼委員さん。

○柿沼敏万委員

母体、中心的な組織としては、地域活動団体では町内会がベースでしょう。私もお世話させていただいています。だけどもそれだけではない。町内会「等」というふうに「等」という言葉が入ると、今のお二人の意見がまとまると思います。

○奥村誠会長

佐藤委員さん。

○佐藤静委員

地域の捉え方ですね。「地域」というのは、時代によって随分変わってくる可能性があって、今は、ネットを通したつながりというのが主流になってきているというか、かなり強力な「地域性」を持って動いていますので、その辺も含めたことが検討されるといいのかなということがあります。先ほどテクノロジーの話が出てきましたので、その辺も含めての検討が必要だろうと思いました。

○奥村誠会長

阿部一彦委員さん。

○阿部一彦委員

先ほど【多様性が活きる社会の実現】の「未来の状況」、「自分を相手に伝える、相手も受け止め」というところで、鎌田委員のご指摘のように「他者をおもんばかる」というのはすごく大事なことだと思いますけれども、自分の困ったこと、不便なことを障害、高齢の人が周りに伝えるということもとても大事なことだと思います。

また、ユニバーサルデザイン 2020 行動計画の中でも、障害当事者の役割としては、自分にとっての社会的障壁、バリアーということを伝える力を発揮することによってお互いに支え合う社会をつくるということがありますので、それぞれ高齢の方も困ったこと、不便なことがあると思いますし、どなたもあると思うので、「伝える」というところは表現を変えてでも、残していただきたいと思います。

○奥村誠会長

榊原委員さん。

○榊原進委員

【地域コミュニティ】のところですけども、僕も「地域コミュニティ」というのはどの範囲を指すのか、今の話と 10 年後と、町内会単位なのか、もしかしたら小学校区単位になっていくのかとか、その辺が少しイメージできません。土地に根ざしたコミュニティと、そうではないテーマ型のコミュニティというのも出てくるかなと思っていまして、それがミックスされる場合もあると思います。「地域コミュニティ強化」という文言自体が今後 10 年後にどういうふうにとらえられているか、もう少し議論が必要かと思ったところが 1

つです。

それに関連して「キーワード」の「⑪地域コミュニティ」のところの「町内会活動活発化」についてです。僕もまちづくり支援で、町内会の方たち、会長の方たちとお付き合いすることがあるんですが、町内会はいろいろな仕事をされているというところがあって、それこそ行政から下りてくる仕事があり、本来の住民同士の顔の見える関係づくりというところが少し手に余る部分となってきたりしているとお聞きすることがあります。本当に「強化」といって、いろんな仕事をどんどん抱きかかえていいのか、もしくは本来地域でやるべき仕事に「特化」していくということもあるのではないかなというところが少し気になりました。この辺については、僕ももう少し議論したいなと思うところです。

○奥村誠会長

小野寺委員さん。

○小野寺健委員

町内会と一括りに言うのですが、さまざまだと思います。郊外の人手があまりいないところの町内会、また、中心部でかなり人がいるところの町内会、町内会によってはほかの団体があって、それのあて職もあるのですが、さまざまなものを町内会の主要メンバーですべてまかなっているところもあれば、いろいろな人間がいて兼務をしなくていいような状態もあり、一概に町内会と言っても、１つではないという中で、どういった支援をしていくのか。町内会にはいろいろな期待をするところもあると思うのですが、町内会は市役所の下請けではないので、そこの部分をきちんと踏まえた上で、市の方はよく「町内会の皆さんと」「地域の皆さんと」と言いますけれども、一緒になってやっていくパートナーだと思うので、それこそ協働という形で出てくると思いますが、その形をいかに確保していくのかというところがもう少しあってもいいのかなと思います。

先ほど柿沼委員がおっしゃっていましたが、町内会と断定するのではなくて、地域を支えていくのは町内会だけではない、他の団体というか組織構成もあり得るというようなところで、社協さんにも支えていただいていますけれども、「町内会等」というところの話はいいのかなと思いました。

○奥村誠会長

浜委員さん。

○浜知美委員

【多様性が活きる社会の実現～ともに活きる～】というところ。私は、外国人のスタッフと接することが多いので、「多文化共生などの理解の浸透」だけではなかなか現時点で整備されていないと常々感じているので、それに伴う整備というのをはっきりと入れていただいたら整備されるのかな。

例えば、ムスリムのお祈り室ですとか、ベジタリアン対応食とか、いろいろなものに対応していかないと交流人口もこれからどんどん増えていかないので、はっきりとした整備

というのを入れていただければ嬉しいです。

○奥村誠会長
　菊地委員さん。

○菊地崇良委員
　町内会の話とか、あるいは多文化共生の話がこれからどんどん進んでくると思うのですけども、多様な主体があるということで、いろいろな参画が予想されるところです。これから外国人の労働の受け入れも始まってくるでしょう。そういった方々の人権とか、意思を尊重することは大事なのですけれども、最終的な意思決定というのはあくまでも地方自治の原則に則ってやるものであって、その代表たるものが地域住民の集合体である町内会である。この関係を平たく同等だというふうに論ずるのは非常に危険だと私は思い、意見として言わせていただきます。

○奥村誠会長
　今委員さん。

○今里織委員
　【多様性が活きる社会の実現】のところで、先ほど「他者をおもんばかる」というお話がありまして、その通りと私も思いました。いじめの問題も出ていましたけれども、自分と違う人を排除してしまうからそのようなことが起こるのかなと感じている部分がありまして、「違いを認め合う」とか、そういった言葉で、「未来の状況」のところに加わると、もう少し広い意味でというか、「自分を発信する」のもそうなのですが「相手を受け止める」のも認め合うことだと思いますので、そういった表現であると良いのかなというふうに思いました。
　「買い物弱者」という言葉が【地域コミュニティ強化】と右側の「⑯郊外地域」というところにも出てくるんですが、こういったところも、町内会を含めて一人だけの声ではなくてまとまった声があると対応し得るところにつながってくると思います。実は私の会社で、前回言いそびれてしまったのですが、買い物弱者の方に向けて「クルリン号」というお買い物のトラックを週１単位で地域に運行しています。リピーターのお客さまがたくさんいてくださるので、何とか頑張っています。ですが、人がかかる、お金がかかる、だけれども何とかしたいというところで仙台市の協力をいただきながら事業を始めて丸２年ぐらいたつところですが、人手がかかって。それが企業の負担になってしまうということが増えるのだけでは駄目だと思うので、その辺も、これはまちづくりと違ったところなのかもしれないのですが。そういった声がどのくらいあるのかとか、そういったものが分かるといいのかなと思いました。

○奥村誠会長
　渡邉委員さん。

○渡邉浩文委員

【地学連携】のところですけれども、大学なり大学生にちょっと特化しすぎている印象を受けます。前回か前々回に初等中等教育に関することを申し上げましたが、少なくとも高校生ですとか、中学生ですとか、そういった方々もこの中に含めるような表現にした方がいいのではないのかなと思います。

特に高校辺りですと、学力の３要素とか探究学習みたいなものに改めて力を入れようとしている中で、そのテーマの１つに「地域」というのは少なからず出始めていることですし、趣旨からしても高校生、中学生をターゲットしていいところではないかと思った次第です。

○奥村誠会長

菅井委員さん。

○菅井茂委員

「キーワード」の「④生涯学習」のところに「歴史文化資源」という言葉があって、(「まちづくりを進めるうえで大切にしたい価値観」の）３番目で扱う「環境」のところには「歴史文化資産」、この言葉は両方ともどちらかに統一すべきことではないのかと感じます。そしてそれがどこに入るのか。真ん中の「重点的な取り組みの視点」のどこにも活かされてないのではないかという気がします。

今、仙台市の文化遺産として大手門の問題が出ていますけれども、それだけではなくて、宮城刑務所というのは、昔は若林城です。若林城がつくられたおかげで、荒町以東、以南は拡張されてつくられた新しいまちなのです。それがたまたま戦災に遭わなかった。現在まで残っている、非常に価値がある歴史的な遺産、そういうものを大切にしていくような方向性を出していただけたらと思います。

法務省の方からしますと、宮城刑務所について仙台市から何ら接触がないということで、どうしていいか分からないというような話もあります。貴重な文化遺産を市民の手に取り戻すことが、今、全然手がつけられていませんから、市民の目に見えるようにしてもらうということもその中に入るのだろうと思っていましたので、この「歴史文化資産」というか「資源」というか、それらを統一して書いていただければと思います。

○奥村誠会長

どうですか。【杜の都】のところにやっぱり入るのかな。「環境」という言葉の中に本当は入るのかな。社会環境というか、歴史環境という感じもします。

先ほど手が挙がっていました。竹川委員さん。

○竹川隆司委員

個別の話というより、全体のまとめ方みたいな話になってしまうので、どこで言おうかと思っていたのですけれども、「重点的な取り組みの視点」とここに書いてあり、「重点的」

ということはプライオリティをつけなければいけないのだろうな、「取り組み」ということは何か最終的にＫＰＩにつながらなくてはいけないのだろうなと、文字を見た時に思っていたのですけれども、このまま続けてしまうと、どこの地方でも出てくる問題が全部広く出てきてしまう気がしていて、何に重点を置くのかという議論をもう少しした方がいいのかなと思いました。

町内会の加入率が高いことはすごいことなので「町内会」でいいとか、大学生が一番、中学生や小学生が大事なら小学生にしようとか、「重点的な」と書いてあるので、どれが重点的なのかというところの議論がもう少しあっていいのかというのと、タイトルの【地学連携～地域で学び合う～】とか【多様性が活きる】というのが、タイトルとしてすごく分かりにくいと私は感じていて、それが直接の取り組みなのであれば、結果としての数字は何になるのか、ＫＰＩに結び付くような「日本一障害者が住みやすいまち」とか、「日本一町内会が元気なまち」とか、そういうまとめ方になった方がいいのではというのが、見て、聞いていて感じた点です。

○奥村誠会長

結構本質に関わるご指摘。最初からそれをやる、できるかどうかという話ですね。

いっぱいある中で、これと、これと、これという話になった時、たぶん前にも言いましたけれども、こういう視点がそれぞれ大事だと言うと、全部大事なのです。だけど、「これと、これと、これと一緒に実現しましょう」「その組み合わせは仙台ではこういうふうにできるでしょうか」というような組み合わせ方のところが知恵の持って行きどころだと思っていまして、それは最初から言っている「掛け算で何とかしましょう」ということなのです。「１個１個でプライオリティつけましょう」とすると、たぶん最後まで収束しないのかなと思っています。

ですので、今の全体の進め方なのですけども、今回３回目ですので、とりあえずこの次の段階の掛け合わす時に、こういうものを掛け合わせましょうの「こういうもの」というのはここのところに挙げておきますけれども、次、掛け合わせ方は、もう少し具体的に考えていただくために部会をつくります。ワーキングをつくります。

「これと、これと、これと一緒にやった方がいいよね」「こういう場を作れば、こういうことも一緒に解決できるかな」というようなことは、もう少し具体的な形でワーキングという感じで進めたいと思っていまして、それの方にシフトするのは、次回からと考えています。

そういうことで、今回は、いわば、役者に挙げるのはこれでいいか、落ちていないかどうかというようなことを中心に議論いただければいいかなと思っています。

本当にＫＰＩにするべきなのか、本来そんな数値目標なんかになるべきものでもないだろうとか、あるいは何年間かで達成すればいいという話でもないだろうというようなものも、ひょっとするとあるかもしれませんが、今の段階でまだどういうふうに諮るかとか、どういう目標、指標を使ってどうこうするという話はしようと思っていません。ご理解いただければと思います。

では、手を挙げていた岩間委員さん。

○岩間友希委員

私も竹川委員と似たことを感じていまして、それは今後解決していくということなので、今後を待とうと思うのですけれども、６枚カードが並んでいる中で、その６枚同士がリンクしている感じがあまりしない・強弱が分からないというのが違和感としてあって、そういう違和感をならしていくと、例えば、「～地域で学び合う～」のところですが、地域で学び合うだけでいいのか、場づくりすればいいのか。場づくりするだけであれば、もう今もやっているような気がしていて、今後 10 年後の話を目指しているのだと思うので、場づくりをすることで地域コミュニティが強化されるとか、そういうふうにリンクしていた方がいいのではないかと思いました。

あともう１つ。商店街とか地元の企業を応援する要素があまり目立たないなと思っていて、それも【地域コミュニティ】とか、「～地域で学び合う～」のところに入れてあげられないでしょうか。商店主の高齢化に伴う担い手不足もよく耳にしますし、地域の商店の元気は地域の元気にも紐づいていると思います。

○奥村誠会長

庄子委員さん。

○庄子真岐委員

２つ目の【多様性が活きる社会の実現】のところでいろいろな議論が出てきたのですけれども、タイトルに「多様性が活きる」という表現を使われているので、さまざまな価値観を持った人とか、さまざまな立場の人たちに、困難な状況下の人たちに手を差し伸べるとか、その人たちの価値観を認め合うというのももちろん大事なのですけれども、多様性の良さというのはいろいろな価値観を持った人たちの考えとかを活かしていくところ、ポジティブなところというのもすごく拾い上げていくべきなのではないか。どう表現していいか分からないのですけれど、さまざまな価値観の人たちがイノベーション起こしていくような、そんな前向きな言葉がここに少し入っていてもいいのかなと思いました。

○奥村誠会長

渡邉委員さん。

○渡邉浩文委員

先ほど発言した際に言いそびれたことを、少し細かい話になるのですが指摘させてください。【地学連携】の部分なのですけども、「地学連携」という言葉は、最近使われ始めた言葉ではあるものの、僕自身はやや違和感があって、この後に「～地域で学び合う～」であるとすると、「地域」というのは場を示しているわけですけれども、「地学連携」というと「地域」と「学」が分かれているというようなニュアンスがにじむので、もう少し丁寧に議論する必要があるのではないかということを、妙案は僕には今ないのですけれども、指摘しておきたいと思い、補足しました。

○奥村誠会長

菊地委員さん。

○菊地崇良委員

「地域コミュニティ」について２つ話したいと思います。今 79.6 パーセントの町内会ですけど、何年か前に比べると下がっているのです。これをいかに下げないでいくかという課題がありますので、優先順位が高いですねという話と、そのためにどういう具体的な施策がありますかということを論じていかなければならないと思っています。

仙台市の条例に、3.11 を経ての「仙台市防災・減災のまち推進条例」があります。議員でつくったのですけど。防災訓練になると、実は、普段出てこないお父さんお母さんもまちに出てくる、我々はそれを見て「防災訓練って地域コミュニティ強化のために１つのベースとして使えるよね」と捉え、理念の中に「すべての市民の安全と安心のため、地域における防災及び減災の取組を通じ」と入れたのです。仙台市では「防災環境都市」を掲げていますし、ここの部分は絶対に外せないと思いまして発言します。

もう１つ、一般的な総合計画の中には、「市民の安全・安心」ということが必ず大きい項目で出てくるのですが、今回この中に出てきていません。それをどこに入れたらいいのか、【地域コミュニティ】なのかどこなのかという悩みがありました。

○奥村誠会長

私も発言させていただきます。先ほどの【地域コミュニティ】のところの話です。今、多様な関わり方が出てきて、どこが責任を持つとかいう話ではなくて、新しく力を発揮していただける、あるいは新しい見方であるとか、そういう関わりを持っていただけるところをやってみていただけるような場というか、関わりというのをつくるというのが本質的ではないかと思っているのですけれども。

一方で、目立たない中で孤立してしまっている、どこにも喋ることができない、誰にも分かってもらえないという方が地域の中に残ってしまうということの問題が結構多くて、町内会がなぜ大事かというと、たぶん、日の当たりにくいというか、忘れられてしまいやすい方々をきちんとケアするというような部分でかなりの力を期待しなければいけない団体なのかなと。

そういう意味が、ここの「基礎的な地域団体」というところに入っているのかなというふうに思いますので、使えるところは、いろいろなＮＰＯさんとか、あるいは好きな人が集まっただけだが地域の活動も一緒にやってもらうみたいなこともやっていけばいいのだけれども、一方で、誰もが取り残されない類の仕組みということで、町内会なのか、別の呼び方をすべきものなのか、そこは分からないのですけれども、そういう組織は必要かなというふうに感じたところです。

では、忘れていましたら今日の場合、最後に総合的なところがありますので。

ここからは中盤の残りの３つ、外向きのところとか、あるいは活力系の、【世界に輝く杜の都の深化】から【働く場所としての選ばれる環境づくり】の３つに関わること、それ

に関連する【横断的事項】のところでお話をいただければと思います。
はい。菅井委員さん。

○菅井茂委員
【都心再構築】の「施策形成の視点」の中に「定禅寺通の活性化を基軸とした」とあるのですけども、今、仙台駅を降りたらすぐ前のデパートが空になっています。降りて「なんだここは」というような感じのする場所です。この中には、先ほど重点という話もあったのですが、仙台駅の西口の開発が全然入っていないので、定禅寺通だけではなく西口も捉えた表現の仕方をした方がいいのではないかなという感じがしますので、ご検討いただければと思います。

○奥村誠会長
小野寺委員さん。

○小野寺健委員
すみません、私が聞いてなかったのかもしれないのですが、「価値観」が左側にあるのですけども、「学び」、「共生」、「環境」、「活力還流」、これは基本的にこの会で確認した上で、次の「重点的な取り組みの視点」に進んでいるという理解でいいのですね。

○奥村誠会長
はい。今日の最後の第３のところで、いや左側のところは違うのだというご意見がどうしてもあるならお伺いします。けれども、前回までの話で左側のところ、重要なところは大体こういうものではないかという合意が、皆さんの言葉、ご発言の中に表れているのではないかという認識でおります。

○小野寺健委員
「都市像」というのも同じような認識でいいのですね。

○奥村誠会長
「都市像」については、今回赤くしていますので、ここについてはご意見をください。

○小野寺健委員
「価値観」を受けた上での「重点的な取り組み」ということで、下の方に進みます。
【都心再構築】はもちろん大切だと思うのですけど、仙台市は広く、海から山まであって、郊外もあって、泉区で郊外団地があるのですけど、そこの部分が取り残された感じがします。中心市街地、コンパクトシティと言うのですけれども、では「今住んでいる私たちっていったい」という、そういった思いが本当に垣間見えるところがあるのです。右の方にはさまざまなこと、郊外の、地域活性化とありますけれども、実際に中心市街地に集約するのはいいけれど、郊外の部分はどうしていくのか、逆に言うと、どこの都市でもそ

ういう形になっていると思うのですが、この郊外の部分の対策をうまくできると、仙台らしさというものが出てくるのではないかなというふうに思っています。

私としては、若者、若い世代が入って来ていただけるような施策の導入に積極的に取り組んでいただきたい。それができてくると、「町内会の担い手がなかなか大変だ」とか、「町内会の加入率、参加率が…」という話がありますけど、それも若者が入ってくることによってある程度見えてくる部分もあるのかなと思いますので、中心部は結構ですけども郊外の方もその辺のところを入れておいていただきたいなと思います。

○奥村誠会長

竹川委員さん。

○竹川隆司委員

タブーな部分、触れてはいけないことかもしれないのですけれども、あえて触れさせていただきたいのですが、【世界に輝く杜の都の深化～仙台を世界に伝える～】とあって、「杜の都・仙台」を「国内外に発信している」と書いてあるのですが、国内外に住んでいた自分の感想としては、「杜の都」とは仙台だけではないだろうと。つまり国内外に発信するといった瞬間に「杜の都」は意味をなくしていて、「杜の都」という言葉はこの地域の中の方々が結束するためにすごく大切な言葉なのですけど、世界に発信する仙台という価値としては、「杜の都」でなくてもいいという気がしています。特に世界にと言った瞬間に、「森がたくさんあるところはいっぱいあるし」とか「環境を頑張っているところもいっぱいあるし」というふうになってしまう気がして。いろいろなところに出てくるので、この地域がこの言葉をすごく大切にされているのだなと感じるのですけども、それは中の人たちだけの言葉になっていないでしょうか。そういう計画なのであればそれでいいと思うのですけど、世界に発信するのでしたら「ザ・グリーンネスシティ・イン・ジャパン」とか、そういう「杜の都」の価値観を大切にしつつ、「ザ・グリーンネスシティ」を世界に発信するみたいな。言葉尻で申し訳ないのですけども、「杜の都」で本当にいいのかというのが、本質的なところとして１点気になりました。

○奥村誠会長

榊原委員さん。

○榊原進委員

私もそこにすごく違和感があります。真の「杜の都」は、緑と共にある暮らしを市民が楽しみ尽くすことが大切だと思います。その結果、もしかしたら「それいいね」と言って世界から人が来るぐらいの感じなので、最初から「世界に輝く」、「世界に発信する杜の都」ではないかと思います。「都市像」でも「市民が楽しむ杜の都」でもいいと思っているのですけど、というのが１点です。

また、「キーワード」のところに「⑥脱炭素社会」というのがあって、「再生可能エネルギー」「気候変動への適応」とありますが、「消費エネルギーを減らす」という視点がここ

にないかなと思います。エコ住宅、あるいは住宅断熱化みたいなところも含めて「エネルギーの消費を減らす」という視点が必要だと思いました。

３つ目の「働く場所として選ばれる」というよりは、もう「仕事を創り出す」というぐらいの話が本当は必要なのではないかなと思いました。

○奥村誠会長

舟引委員さん。

○舟引敏明委員

世界の話が出たのは私の責任かもしれません。「世界に向けて」は「仙台市だけではなくて仙台都市圏が東北で一番金の稼げるまちになってもらわなければいけない」という話を前にもしましたけど、そういう意味で「杜の都」を世界に売り込む。

実は仙台市の人に聞いたことがあります。「杜の都」を英語にしたらなんて言うのですかと。そしたら「シティ・オブ・ツリーズ」。おいおいそれではだめですね、と。ですから外国の人に通じる「環境都市」とか言い方はいろいろあるのですけど、そこは考えないといけないのだと思います。環境が良いことをきちんと売り物にしていくということで言うと、緑はかなり書き込んでもらってありがたいのですけれども、緑だけで都市はきれいにならないし、美しさとか、やっぱり街並みが必要です。例えば、風格があるとか、品格があるとか、そういう価値尺度の目標値を掲げておかないといけません。これは何故かというと、ペーパーの中に「老朽化した建物の更新など」と入っているのですけども、これはとっても重要で、まちがきれいになるのは老朽化した建物を建て替える時にしか、だんだん徐々にしかきれいにならないです。実例は東京駅、大手町だとか丸の内、もう 20 年ぐらい前から１つのルールをつくって、老朽化した建物を建て替える度にそれに合わせて街並みをつくっていくということを繰り返し、世界のビジネスセンターとして人が集まっても恥ずかしくないようなところになっているということがあるので、そうした美しさとか品格とかいうようなことも、どこかに少し散りばめておいていただくと都市の更新の時の１つの物差しになるんじゃないかと思います。

○奥村誠会長

柿沼委員さん。

○柿沼敏万委員

「杜の都」の話でしたけれども、そもそもこの総合計画を策定して実践していこうというのは、大部分が仙台市民だろうと思います。「杜の都」というのは、世界的にどうかという話はごもっともだと思いますけど、少なくとも日本の国内では、「杜の都・仙台」は１つの言葉として通用していますし、皆さんに認知されています。ですから私は「杜の都・仙台」はどうしても必要であるし、ここに残すべきと思うのです。

対外的なもの、世界にということであれば、新たに仙台を売り込む、仙台ということをアピールする何らかの言葉、世界に通じるものを、この際皆さんでお考えいただきましょ

う。国内的には「杜の都・仙台」で結構です。ですが世界にという時には、この言葉を使いましょうというような。この前、次世代放射光施設を視察してきたのですけども、ＳＰｒｉｎｇ−８　（スプリングエイト)、事業名がＳＡＣＬＡ（サクラ）ということで世界一だと。ネーミングからしてそういうふうな感じなのですね。仙台らしさ、仙台の強みというものを、世界に通じる言葉というものを、この際つくられたらいかがでしょうかということを申し上げたいと思います。

○奥村誠会長

やしろ委員さん。

○やしろ美香委員

１つ前の話題に戻るのですが、榊原委員でしたでしょうか。【働く場所として選ばれる環境づくり】のご発言があったと思ったのですが、私も全く同感でございました。

また、前に戻りますが、【地学連携】のところで、学生たちに地域に関わって地元に定着をしてもらいたいと言ってはいるものの、現在仙台には働く場所がなくて、首都圏に流出しています。東京への労働力の供給が日本でナンバー１と大変不名誉な都市に今年度なったという現状を考えると、働く場所として選ばれようにも働く場所がない現状で、この書き方では少し消極的ではないのかなという気がいたしました。今、本当に現実として若い子どもたちが働く場所がありませんので、ここのところの表現は積極的に「雇用の確保」というか、少し書き方を工夫していただければと思います。

○奥村誠会長

菊地委員さん。

○菊地崇良委員

私もいつか言おうと思っていたのですけど、「杜の都」という「キーワード」です。大事にしていますが、「杜の都」の定義とは何かということが実は深く議論されてきていないのではないのかと思います。左側の「価値観」の中に「環境（杜の都)」と申し訳程度なのか、整理したものか疑問なのですけども、ここの部分をどこかで一度つくって整理していかないといけないだろうと思います。総合計画でＫＰＩを入れるものもあるかもしれないけれども、仙台市民が、あるいは仙台市という都市がどのように向かうかという理念を打ち出すものであるのですから、そのネーミングの代表的なものである「杜の都」を使っていくのであれば、都市政策なのか、あるいは例えば歴史資源の仙台城とワンパックの杜なのか、あるいはグリーンなのか、ここは避けて通れないと思います。これが１つ目です。

２つ目は、【都心再構築】の話です。これは仙台市の方で総合計画に併せて都市計画マスタープランをつくってまいります。今、人が減っていく中、どんどんスプロール化が進んで歯抜けのまちをどういうふうに効率よく運営していくか。残酷なことであるのですけれども、しかし、そうやっていかないとこれからの地方自治はやっていけません。あるい

は財政も運営できません。でもその部分が、実はあえてここに書かれていません。それも避けて通れないところなのではないでしょうか。先ほど小野寺委員が言ったように、郊外地域に生活の価値観を見出す方のために、どういうまちを提示するか。詳細については都市マスタープランの中で論じられるかもしれませんが、そこも見据えた書き込みをこの【都心再構築】と併せてやっていかなければいけないのではないかというふうに思いますので、これもどこかの議論の中で深めていただきたく、発言してまいりたいと思います。

もう１つだけ申し上げたいのは、「都市像」の話です。これもいつか言ったかもしれないのですけども、一番左下の【横断的事項】に「一人ひとりの溢れ出すアクション」とあります。ここに尽きる部分もあると思っていて、実はこれは「都市像」に入ってくるのではないかと。「都市像」とともに望ましい市民像みたいなものが本当はなければいけないのではないか。今までは口開けて「あれやってくれ、これやってくれ、これつくってくれ、これ準備してくれ」というのができた時代ではあったけども、向こう何十年間でそれができなくなっていく。そうなった時に自分たちで自主自立を図り、それをもとに共生、協働をしていくという前提の部分もその「都市像」の中に本当は入ってこないと、実は持続可能な社会なんかできないのではないかということもありますので、【都心再構築】に絡めて申し上げます。

○奥村誠会長

姥浦委員さん。

○姥浦道生委員

今の郊外につきまして、少しだけ付け加えです。大体申し上げることは同じなのですが、郊外の、特に住環境をどうするのかというところです。前回配られた資料に「空き家」というのがありましたけれども、「空き地」も増えてきますので、状況を生かしてミクロなまちをどう更新していくのかが恐らく重要で、大きく再開発するとか大きくどんと変えるという話ではないと思うのですが、そういうふうなまちを再編することによって、そこの魅力をどう高めていくのかという話かと思います。切り捨てるということというよりは、そこの変化なり更新なりを生かした住環境、より良い住環境、より良い魅力の向上という、そういう観点からの郊外地域の再編というのが非常に重要かと思いますので、少し付け加えになりますが申し上げます。

○奥村誠会長

佐々木委員さん。

○佐々木綾子委員

【働く場所として選ばれる環境づくり】のところに「成長力のある企業が集まり」という言葉があるのですけれども、その言葉に、地元企業、地元の中小企業とかそういったところの意味合いが含まれているか、ちょっとおざなりになっているのかなというニュアンスを受けます。先ほど榊原委員がお話されたように、「働く場所として選ばれる」という

ことは、仕事が増えていかなければいけません。そうした中、地元企業、地元の中小企業というのはそういう部分を担っていらっしゃいますし、後は柔軟な就労環境をつくるためには、そうした企業の売上が伸びて順調でなければ「選ばれる環境」もつくれないということもございます。どこかの文言でそういった「地元企業、地元の中小企業の成長を」といったところを付け加えていただけるといいかなと思いました。

○奥村誠会長

遠藤智栄委員さん。

○遠藤智栄委員

【都心再構築】のところですが、ご発言が皆さんからあるように、注目の部分だと思います。ここの部分に関して、進め方とかプロセスのことで少し発言したいと思います。

私、都心再構築に関わってくるような委員会に参加させていただいています。ただそこでは、その担当課での部分の話しかできないので、とてももどかしい思いで委員会に参加していいます。今後、ワーキングに分かれて話をするということですが、ワーキングがどのようになるか伺っていないので、そこは保留してお話するのですけども、そのワーキングの委員の方の参考になるように、市では専門家ですとか有識者ヒアリングとかされると思いますので、都心再構築に関係している仙台市民とか専門家とか知見のある方のグループヒアリングとかを事前に公開でしていただく、専門家の皆さんの都心再構築に関するいろんな知見をワーキングの方に資料としてお出しいただくというのもいいのかなと思いました。建物だけでも今いろいろな建物が計画されていますし、後は「杜の都」のことでも公共空間のことですとかいろいろ議論されていますので、そういったプロセスもご検討いただけたらなと思いました。

もう１つは【働く場所として】のところです。私も皆さんの発言の通り、働く場所がないから東京、首都圏に行くという話を伺うのでその点と、後は「成長力のある」というところですが、もちろん成長力があった方がもちろんいいのですけども、成長力だけかなと。ある意味持続可能な組織も大切だと思いますし、そうなった時に社会とか、課題への適応力とか、その都度組織を変革していく力とか、その辺りも今後皆さんと議論していけたらいいのかなと思いました。この【働く場所】のところは、企業をメインで考えているのか、それとも組織を考えているのか、いろんな組織がありますので、その辺りも今後少し考えていきたいなと思いました。

○奥村誠会長

舘田委員さん。

○舘田あゆみ委員

個人的に「杜の都」というフレーズは非常に好きなので、「杜の都」というものを残しながら新しい「都市像」を目指すのがいいのかなと思います。これは言いたいことと関係なかったのですが。

今、「働く場所」がないという話を皆さんおっしゃっていたのですが、実際、人が採れないと言っている企業、採用したいのに誰も来てくれませんという企業が仙台市内には非常に多く、それから沿岸部のいろいろな水産とか加工の企業さんも働き手がほしいのに誰も来てくれないと言っています。個人的な感覚としては、アンマッチがあるのかなというふうに思います。

仙台のよそと違う魅力とか特徴とは何なのかと少し考えた時に、私は前回からＩＣＴの視点で言っているのですが、最近誘致されている企業はＩＴ系が多くて、実はＩＴ関連の企業に就業している人数が非常に多いと思うのです。そこで、「誰にでもやさしいＩＣＴ」みたいなのはどうかと前回ご提案しました。福岡市を見ましたら、あちらはそれをもっと強く打ち出していて、テクノロジー最先端でまちをつくっていくんだということで、「エンジニアフレンドリーシティ福岡」という感じのことを言っています。エンジニアにフレンドリーなシティなのです。技術者をたくさん集めてエンジニアの人たちが楽しいまちにする、テクノロジーというのはいろいろなものと掛けられるのでアグリテックとか、ヘルステックとか、最近は政治とテクノロジーでポリテックとか、いろいろなものに掛け合わせていくことができるので、それによって仙台というまちを活気づけたらいい、福岡に先を越されたのでそれに代わる何かがあるといいと思っております。

○奥村誠会長

小野寺委員さん。

○小野寺健委員

仙台は仕事はあるのですね、中小企業を含めて。甚だ残念なのは東北大学はじめ理工系の、理系の方々がこの仙台に留まっていただくような職というか、企業というかそういったものが見当たらないので、せっかく東北大学はじめ大学においでいただいたとしても、仙台から離れてしまわざるを得ないという状況もあるのかなというふうに思います。

今、テクノロジーという発言がありましたが、私も大賛成です。仙台って意外と理系が多いまちなのかなというふうに思っています。そういった理工系の出身の先生、委員の方もいると思いますが、理工系の方々が活躍できるまち、仕事を含めて。そういったことで研究所なのか、企業なのか、そういったものも含めて、ここに社会起業の促進とありますけど、そういった形で、仙台に、仙台を選ばれるような環境づくりができる企業、しかも特に理系、そういう形の部分は考えられないのかなというふうに思っていますから、今の委員の話に激しく同意しております。福岡に先を越されたのは甚だ残念ですが、仙台も越していけるような形で持っていければいいと思いました。

○奥村誠会長

浜委員さん。

○浜知美委員

最近ベトナムですとかインドネシアに行く機会が結構ありますが、それらの国々が本当

にどんどんと急激に進化していることを実感します。仙台も１つの都市として、東京がもちろん日本の中心であるのですけど、仙台もその国の都市に勝っていかなければいけないというふうに、帰国するといつも思うのです。そのためには世界から選ばれる地域にならなければいけません。その中でコンベンションとか、学都とか、働く場所とか、もちろん旅行の場所でというふうにいろいろなことが紐付けられると思うので、もっと世界を意識して、この 10 年は動いていいのではないかなと私は思います。

コンベンション都市仙台といって国連防災世界会議とかも来た経緯があるので、もっともっと国際都市をアピールして世界へ発信するのももちろん大事なのですけど、人が来る、来てくれて私たちも交流する、世界に出ていくような都市にならなければ。もう人口減少は確実なので、埋没していくというか、東北を牽引できる都市にならないのではないかなと思うので、この中のどこかにそういうことを少しずつ入れていければいいなと思っています。

○奥村誠会長

今野薫委員さん。

○今野薫委員

商工会議所の立場でございますので、どちらかというとこの【都心再構築】という部分の発言になるのですが、私どもの方で今取り組んでいるまちづくりの委員会、そちらの方でいろいろ議論をさせていただいているところのエッセンスを非常にうまく取り込んでいただいているなという感じがしてございます。感謝申し上げたいと思います。

揚げ足を取るわけではありませんが、例えば「通りごとの魅力づくり」とありますが、もう少しエリアですとか、エリアといっても都心と言っているわけですから当然限られてくると思うのですが、面的な部分という形でもう少し広く捉えてもいいのかなというのが個人的な感想です。

後は中心部の商店街の部分なのですが、これも「魅力アップ」という状況ではないのかなと。「再生」に力を入れていかないといけないという段階だというふうに思います。それと、これからの議論で掛け算の部分になってくるのだと思いますが、町内会などの部分で、周辺の商店会、企業、こういったところが果たしている役割が大きいので、是非こういったものを今後議論していければなと思っております。

○奥村誠会長

姥浦委員さん。

○姥浦道生委員

もう１点だけですけれども、【都心再構築】のところで抜けているかなと思うのが「住環境」です。最近都心部でもマンションが非常に増えてきておりますし、それから昨日か今日か一昨日か忘れましたけど、朝日新聞にちょうど災害公営住宅、長町の方が取り上げられていました。ああいうような形のことというのは、長町は規模が大きいというか、敷

地規模が大きいので起こりやすいのですけれども、ほかのところでも起こり得る話でございまして、そういう都心ならではの住環境、必ずしも先ほど申し上げた郊外と同じとは全く思わないのですけども、どういうふうに考えていくのかというところは、これからの議論の中でも、【都心再構築】は１つ重要な点かなと思いましたので申し上げます。

○奥村誠会長

渡邉委員さん。

○渡邉浩文委員

【杜の都】のところです。「世界に輝く」のところは先ほどの議論なので繰り返しませんが、「深化」というところは、僕はうまくまとめてくださったなというふうに思っています。

前回、僕は踏み込みの強さを積極的に評価していたのですが、まずいだろうと思っているのは「脱炭素」という言葉です。改めて括弧の中の「気候変動への適応」ですとか、エネルギー政策ですとか、先ほど他の委員が指摘された低エネルギーといったところを総合すると、特に「気候変動への適応」というのは、脱炭素できないので適応のことも考えていきましょうというロジックの言葉なので、「脱炭素」という言葉が少し強すぎるなと思い、やはり言わなければいけないなと思ったところです。

「気候変動への適応」は、この部分を「低炭素」と仮に言い換えるとしても言葉の中に収まる言葉ではありませんでして、どちらかと言うと、いわゆる気候変化に伴う気象災害ですとか、自然災害に対してどう適応していくのですかという言葉なので、どちらかに含めるとしたら、この「脱炭素社会の実現」というところよりは後ろの部分の方にかかってくる言葉ではないかなというところを、少し整理する必要があるのではないかと考えました。そこを踏まえてこの上の「未来の状況」を考えると、「災害に強く」という一言にその辺の議論が含まれるのかも知れませんけれども、もう少し丁寧に表現した方がいいのではないかなと考えたところです。

やや後出しになりますが、一番右の「キーワード」の部分も、「⑥脱炭素」という言葉は本当にいいのかなということと、「気候変動への対応」というのも「キーワード」なのでここでいいかもしれませんが、場合によっては「⑫防災環境都市」の方がいいのではないか。⑫を改めて見ると、先ほどＩＣＴという言葉が手垢にまみれているというようなご指摘がありましたが、わざわざここに「ドローン」などと書いてあるのも、かなり気になるということで、行きつ戻りつ議論というのを進めていくのでしょうけども、僕の目に止まるところはそのようなところです。

後は、将来の掛け算の議論につながるかもしれませんが、やはり気候変動ということで申しますと、都心部では暑熱化がさらに進むというような懸念が強くありますので、【都心の再構築】、都心がどこかという議論はここでは脇に置くとして、やはり回遊性なり賑わいをということと共に「快適性」とか「居心地の良さ」というところも是非議論の対象にしていただきたいなと考えたところです。

○奥村誠会長

飯島委員さん。

○飯島淳子委員

夢のある議論の中で申し訳なく存じますが、仙台市では、2020 年まで人口が増加するけれどもそれから減っていって、2050 年に高齢者人口がピークになるという中で、体力のある今こそ、先を見越した持続可能なまちづくりをしていかなければならないという、もう少し現実を見据えた堅実な議論も必要ではないかと思います。とりわけ、「働く場所として選ばれる」とか「人を集める」とか、仙台市が他の地域に対して奪い合う、一人勝ちといった状況にならないよう、東北地方を支える中核都市として持続可能な経営ができるかというような視点も必要かと思っております。

○奥村誠会長

阿部一彦委員さん。

○阿部一彦委員

先ほど浜委員がお話されたように、「⑩交流人口」の「ＭＩＣＥ誘致」というところは、バリアフリー観光ということですごく着目されていて、大事な取り組みだと思います。

例えば、仙台では車椅子を利用する方が宿泊するホテルを見つけるのが大変だということがあります。それでパラリンピックの事前合宿の誘致などでもそれがネックになっているところがありましたし、国際的にさまざまなコンベンションということで取り組んでいく時にも。高齢の方も車椅子を利用して旅行できるわけですが、ホテルが今ネックになっていますということだけの紹介に留めます。これからホテルの１％は車椅子を利用する方も使えるようになっていくということではありますけども、本当にそれがネックになっているために、例えばですけども 2015 年の国連防災世界会議の時にも私たちいろいろなところから言われました。車椅子を利用する人の宿泊ホテルを探すのが大変だったという事実をお伝えさせていただきます。ホテルに車椅子用の部屋をたくさんつくるという条例がつくれるか分かりませんけれども、何かそういうところがあれば、多くの方々、高齢の方々も仙台を訪れるのではないのかなって思って発言させていただきました。トイレも含めて。

○奥村誠会長

折腹副会長さん。

○折腹実己子副会長

【都心再構築】のところで、高齢者が郊外の団地などからまちなかのマンションとか、まちなかにある高齢者住宅に移り住んできている人が結構いて、元々いた団地の自分の家は広い敷地を２世帯の住宅につくり替えたりして団地の中の住宅の構成が少しずつ変わってきているような感じがあります。まちなかに、【都心再構築】の中に、先ほど姥浦委員が都心の中での住環境のこともしっかり考えるという時に、高齢者が移り住んでも孤立

化しないとか、そういったこともあわせて検討できるような、そういう「快適性」とか、先ほど「風格」といったこともありましたけども、本当に安心して暮らせるような、まちなかで買い物難民にならず、交通難民にならず、生活できるような住環境の整備というのも今必要な時かなと思いましたので、そういったことも併せて考えていただけるといいかなと思いました。

○奥村誠会長

榊原委員さん。

○榊原進委員

【都心再構築】という言葉ですが、都心はたぶん仙台市で固定資産税を一番払っているところだと思います。やっぱりそこに稼いでもらうという意味で、「～動きのある仙台を創る～」ではなくて、「稼ぐ仙台都心を創る」というふうに言い切ってしまってはどうかと思います。細かいところは今皆さんから出た意見と同じです。

○奥村誠会長

岩間委員さん。

○岩間友希委員

「～仙台を世界に伝える～」の部分です。私もシティセールスとして売り込む要素っていうものをもう少し議論したほうがいいのではないかと思っていたのですけども、ここの特に「災害に強く」のところで、私が５年前に仙台を選んだ瞬間のことを思い出しました。

災害に強い環境、例えば建物とか免震構造の建物を整えるだけであれば、東京とかがわれ先にやっていて、東京を追いかけるみたいな精神のままではシティセールスとしてはやっぱり弱いと思うのです。私は３．11 を東京で経験したのですが、その時に同じ都市型の災害でも東京では電車の中で殴り合いとかが本当にリアルにありました。帰宅難民が大勢まちにあふれてとか、こちらよりも震度が小さかったにも関わらず、そういったことが同じ都市で起きていたのです。

一方で、その後に何か手伝わなければという中、ボランティアとして宮城の生産者を手伝うイベントに参加したことが宮城に来るきっかけになったのですけれども、その時に感じたのは、そういう東京の殺伐とした災害対応のことではなく、すごい被害を受けているのに、人のことを助けるとか支え合うとか、本当に人のことを心から考えている人がすごく多く、それが強烈なインパクトを私の心に残したのです。「災害に強い」ということをもっと丁寧に議論すると、世界に打っていく要素になり得るのではないかと思います。底力というのでしょうか。災害が絶対来るという精神のもとに、それでもしなやかに復興を越えた成長を目指しますとか、そういうレジリエンスを持っているまちだと思うので、先ほど市民像という言葉がありましたけど、この計画の中で表現できるのかできないのか、そういうのをシティの要素として入れてもいいのではないかと思いました。

○奥村誠会長

佐藤委員さん。

○佐藤静委員

今のご発言に私も共感するところがあって、私が最初に「心や命を守る」、そういう「都市像」を言いましたが、その辺りとも重なるところだと思います。仙台はそういう体験をしていてその辺の基盤というか、心や支え合いのところを、ある意味資源として持っているところではありますので、その辺りはとても大事なご指摘であると伺いました。

○奥村誠会長

庄子委員さん。

○庄子真岐委員

先ほど阿部一彦委員がおっしゃったバリアフリー観光のところで１つ、こんなことができないかなということで提案させていただきます。バリアフリー観光でハードを整備していくこともちろん大事なのですが、一方、ソフト面でカバーできるところもあると思うのです。私は８カ月の息子を抱えてロンドンオリンピックの時に、ロンドンに姉が住んでいるのでロンドンに行ったのです。その時にオリンピック会場の付近というのはすごくバリアフリーが整備されていて、エレベーターが付けられていたりとか、細かく整備されていたのですけど、姉が住んでいたのがちょっと郊外の方でしたので、その辺は全く何も整備されていないのです、地下鉄とか。そして、息子と２人だけで出かけたい時、地下鉄とかどうすればいいかと姉に相談すると、「大丈夫。そこに立っていたら誰か絶対手伝ってくれるから」と言われたのですが、本当に２秒くらいでみんな手伝ってくれるのです。スーツケースも持ってくれるしベビーカーも持ってくれる。これは素晴らしいなと思いました。こういったことを例えば仙台でできないかなと。もちろんハード面も整備していくけども、「心の豊かさ」というか「心のバリアフリー」みたいなのも打ち出せないかと。今の発言にたぶん通じるところはあると思うのですけどもその辺を「キーワード」の中に入れていくというのも大事なことなのではないかなと思いました。

○奥村誠会長

そのほかどうでしょうか。中坪委員さん。

○中坪千代委員

１つだけ気になったのが、【働く場所として選ばれる環境づくり】の出だしの「成長力のある企業が集まり」という部分です。では中小企業、これから起業したい方は…。私的にはこの文章がかなり気になりました。また、「自分のやりたいことにチャレンジ」という部分とリンクしないと思われましたのも、気になったところです。

また、全体に関わることを。今、私は過疎化が進む離島の方々からいろいろなお話を聞いています。ある村役場の方に移住定住の、今流行りでもあるのですけど、その内容を聞

いたところ、鹿児島のある村なのですけど「しおかぜ留学」と言いまして、小中学生の、首都圏で不登校だったりいじめにあったりした子どもたちを里親制度として１年間、２年間その村で育てるという制度があり、それについていろいろお話を聞いたところによると、全く関わりがない、生まれ育ったところでもないのに、その小学校や中学校に２、３年間いただけで、「僕は大学を卒業したら村に戻って仕事をします」という形で、その留学生の子たちが、今本当に大学を卒業してから戻ってきてくれているそうです。そうした話を聞いて、素晴らしいことだなと思って先日お伺いしたのですけども。魅力だったり、働く場所、本当に３百何十名とかの村なのですが、「そこで自分の居場所を見つけた、やりがいを見つけた」って、その子は面白いことに、キャリーバッグとパソコン１台だけを持って村に戻ってきたらしいのです。それでおばあちゃんたちが、「あの子、戻ってきたと思ったら牛の世話しながらパソコン広げている」なんていう話をして、「もうパソコン１台あれば僕は仕事ができるから、だから村に戻ってきたのだ」って話をしていて。やっぱり環境と地域性と肌に合っている部分をつくっていっているのだなと思いました。村の方に聞いたら、ここまで来るのに 10 年以上かかったそうです。

そちらの都市像でしょうけど、１つのことに目標を定めたとおっしゃっていました。まずは子どもたちを大事にする。そこでどういった環境だったり、助成金ですね。そういう部分では保育園だったり。それこそインフルエンザの予防接種はその村では高校生まですべて無料という形をとっていたりということで、そういう細かいことから子どもたちを育てて戻って来させるという施策を行ったようです。「都市像」がこれだけ何個かあるというよりは１つに絞って、まずはというところから考えていくのもいいかなと思いました。

首都圏だったり、ほかの政令指定都市と肩を並べていろいろなことを見るのもいいのですけど、そういった逆の面、そういう小さな村でも人が集まって来ているという現状をいろいろな面で取り組めていけたら、前に進めることでもあるのではないのかなと思い、参考としてお話をしました。

また、「杜の都・仙台」なのですが、私一昨日までタイのバンコクにいまして、某企業さんのずんだシェイクをバンコクで飲んだのですね。そうしましたら周りの、それこそベトナムの方とかミャンマーの方が並んでいて、これは何かと質問され「ずんだ仙台」だと答えましたら、タイの人たちは「ずんだ仙台」「ずんだ仙台」と復唱して。やはりインパクト。東京の方だと「萩の月・仙台」だったりもするのですが、インパクトとイメージ。「杜の都」は残しつつ、何かしらを与えられるものがあったら、定着できるのではないかと思いました。

○奥村誠会長

そのほかはどうでしょうか。私が喋っても大丈夫でしょうか。はい。ありがとうございます。

こういうふうにやってしまうと、どうしてもそうなるのですけど、働く場所って誰かが用意するものですか。環境って誰かが用意するものでしょうか。では郊外の住宅地の問題は誰かが解決してくれるのですか。違いますね。そこにはその地域の課題を解決するための仕事もあるだろうし、活躍の場もあるだろうし、あるいはそこから学ぶ場もあるだろう

しというようなことで、先にこの分野、この分野、この分野と言ってしまうから、そこのところがなんか残ってしまうようなところがあって。

それから「杜の都」も皆さん大事にしているのは私もよく分かるのですけども、先ほど発言がありましたように、定義もはっきりしてないというところもあって、皆さんが違う姿をそこのところに見ているのかもしれないと思います。この「杜」とは、私はたぶん東北だと思うのです。だから東北から人を預かっています、我々。「仙台だけ伸びればいい」とか「高齢化してなければいい」という話じゃなくて、それは周りの犠牲によって成り立っているのです。だから預からせていただいている人たち、彼らが例えば自然に対して、あるいは防災もそうなのですが、防災環境的なことも含めてなのですが、自然と人間がどう向き合うのかとか、あるいはその中を踏まえた上でどういうものを産業としていくのかとか、あるいは技術をどういうふうに生かしていくと、それと整合性のあるようなことができるのかみたいなことをトライアルしてくれるような場所を仙台につくらないといけなくて。その力は仙台だけの力ではなくて、最低でも東北の力、本当は世界の力であると思うのですけども。東北の力であるはずなのですね。

ですから、そういう意味で言うと、どれが大事かというよりも、もう１回戻るのですけども、結局のところは掛け合わさないとしようがなくて、逆に言うと掛け合わさないと、こういう話をするとどうしてもこうなるのですけど、誰か立派な人が出てきてその人ががばっとあれこれ解決してくれるような他力本願的な議論になりがちなのです。市役所が良い立派な企業を選んできて、それに頑張ってもらって、そこからお金も出してもらって、人材もっていうことになりがちなのだけども、たぶんそうではなくて、結構先のことですから、チャレンジして失敗しながらも皆で学び合って少しずつ良くなっていくというような環境が、実はこれからの時代は大事じゃないかなというふうに思って、その時に失ってはいけないのは、自然あるいは風土とか、そういうものの理解、それが「杜の都」というところに関わってくるのかなというふうに感じています。

今日まだご発言いただいていない方はどなたかなと思いながら見ているのですが、例えば農業ですね。遠藤耕太委員さん、農業は儲ければいいということだけでなく、人間と自然がどう認め合っていくのかというものすごく本質なところもあると思うので。その辺りでご発言いただけませんか。

○遠藤耕太委員

農業のことを喋りたかったのではないのですが…。

「大切にしたい価値観」の中に「東日本大震災の教訓」とあり、「重点的な取り組みの視点」とつながっています。私は沿岸部に住んでいますので、どうしても東日本大震災っていうとけっこう暗いキーワードになるのですけども、この「～仙台を世界に伝える～」というところ、簡単に「災害に強く住みよい都市環境」とか、そういうことだけではなくて、もう少しその辺も踏まえてどこか、いろんなところに入るのかなと思ったのですけども、皆さんに考えていただければと思いました。

○奥村誠会長

菊地委員さん。

○菊地崇良委員

農業の話が出なかったので、私が代わりに農業の観点から。いわゆる国土保全の、あるいは食料保障の観点から必要だということは類を見ないということですが、もう１つ言いたいのは、会長が今おっしゃったように、「東北の人は何で人がいいの」とさっきお褒めの言葉があったのですが、やはり豊かな自然の中に囲まれた田舎の人だからだというふうに私は思っているのです。ですから「都市像」の中に「緑豊かな自然とともに共生する」という都市像、市民像というのがあって初めて次の項目に入っていくのかなと。大前提の利点を掲げるべきだと思っています。

先ほど言いかけて止めたのですが、我々の都市のアイデンティティーというか、どうあるべきかという目標像がやっぱり確立されて初めてその次に、この文言では個別に「未来の状況」と書いてありますけど、未来の目指すべき姿ということだと思うのです。それがその大前提となるものが何かというのを、先ほどの会長の言葉の延長で、議論、あるいは意見を集約していただければと思います。よろしくお願いします。

○奥村誠会長

そのほかどうですか。この下の３つぐらいはよろしいでしょうか。言い残したことはございませんか。阿部重樹委員さん、いいですか。

○阿部重樹委員

一番左端のところで…。

○奥村誠会長

はい、分かりました。

では真ん中辺りはここまでにして、次は「都市像」、あるいは左側のもう一度戻って「価値観」というところ。ここはたたき台として前回から暫定的にお示ししているところなのですけれども、やはりここがしっかりしないと結局何を目指すのか分からないみたいな話もありますので、改めてここについてご意見いただきたいと思います。

これは終了時間ぎりぎりまでいっても大丈夫ですので、半時間使っても大丈夫かな。

柿沼委員さん。よろしくお願いします。

○柿沼敏万委員

タイトルに「まちづくりを進める上で大切な価値観、仙台らしさ」とありますが、仙台らしさ、仙台の強み、仙台ならではのという部分が、「都市像」の言葉の中からなかなか引き出せない感じを持っています。特に、「人を集める」ということ、「ひとが集い、起こす人」とかいうようなところです。これから 10 年間こういう仙台市のまちをつくりましょうということとして、それではどんな言葉がいいですかと言われると困るのですけれども、少なくともここの言葉が１つの案として、ヒントとして出ていることならば、それな

りで結構なのですが、これがどの程度の重みをもってここに書かれたのかなと。少なくとも「人を集める魅力と機能」「生活しやすい、住みやすい」というようなことではなくて、もう少し本来の、今、会長さんもお話されていましたけれども、「都市像」、目指す仙台市の 10 年間の姿というものをここで表現すべきものなのかなと。前回発言させていただいたのはここにあるわけですけども、やはり持続的な発展をというようなこともあれば、この左側の言葉に１つ集約をして、「都市像」に組み入れたらいかがでしょうか。今ここに出ている言葉では少し重複しますし、「仙台らしさ、仙台の強み」というのが今ひとつかなと思っておりましたので、私自身も次までの宿題にさせていただこうかなと思っていました。

○奥村誠会長

左側上ですね。一番上のところと特に左側のところでご意見を今いただかないといけないので。菅井委員さん。

○菅井茂委員

「環境」のところに「東日本大震災の教訓」とありますけども、災害があったことだけが教訓ではないと思うのです。私は毎月あちらこちらへ行って震災の時の避難所の在り方、それから町内会の在り方を話しているわけですが、その中で先ほども出てきましたけども、「みんなが助け合ってやっている」、これが素晴らしい教訓だろうと思うのです。そのためにはではどうするのだというと、みんなで顔を知っている関係になっていくこと。先ほど町内会というのがありましたけれども、町内会は基本的にはそういうことがあるので、そうやって顔の見える関係をつくっていって、そういうのが仙台なのだよと。仙台ではそのために結構エネルギーを使っていると、町内会ではですね。そういうことが是非この「都市像」の中にも入っていたらという感じがしました。

もう１つは、「起こす人が住む」とは何か。ここももう少し推敲して書いていただけたらなという感じです。

○奥村誠会長

阿部重樹委員さん。

○阿部重樹委員

今のことに関わって１点と、もう１点別に。

会長がおっしゃられているように掛け算の話なので大変難しいと思いつつですが、今ご指摘があった「東日本大震災の教訓」。これをここに落ち着かせても構わないと思いますが、「共生」の方にあってもいいでしょうし、それから「学び」の方にあってもいいというような気がするのです。風化ということも今言われていますから。ですからどこに置くかということは検討していただいた方がよろしいかなというのが１点です。

もう１点はかなりマニアックなのですが、「共生（多様性）」の「地域包括ケア」、僕はこれでよろしいと思っていますが、大々的に検討してもいい選択肢として、「地域共生社

会」という言葉もあり得ると思うのです。「地域包括ケア」の方に市民権があって浸透しているのですが、ここ２年くらい「地域共生社会」が出てきています。「地域共生社会」の方は政策理念とか政策目標として使われている用語です。ここに「価値観」とあるので、そういう意味では「地域共生社会」もありかなと思いますが、ワーキンググループの方にお任せをしつつ、ご検討いただいてもよろしいかなということです。

○奥村誠会長

鎌田委員さん。

○鎌田城行委員

先ほどまで「重点的な取り組みの視点」ということで上３つ、下３つで確認されて、その上で「都市像」並びに「価値観」という話ですので、ざっと振り返りながらも確認したいなと思っていました。

いろいろと皆さまのご意見を聞いていてなるほどと思ったのは、上３つはある意味「人」の問題で、下３つは「土地」であり「環境」の問題なのかなと。上３つについては、これから頑張っていただく世代に光を当てながら、なおかつ真ん中で「多様性」に触れ、そして最後の止めとしてあらゆる人に対して光を当てていくという観点でまとめられたのかなという思いがある一方、下の方は、冒頭でこの「杜の都・仙台」というものを確認し、グーグル・アース的にずっと絞り込んで見ていった時に仙台があるという捉え方。この「仙台」は絞り込みの具合によっては仙台市であり、宮城県であり、東北でありというそういうところの部分での確認をしていきたいというふうな勝手な思いを、皆さんのご意見をいただきながら描きました。

そして、【都心再構築】はそれこそ産業の中核となるべきところ、都市部であり、一方で、それに対する郊外であったり、もう１つは商業地、産業地であるところに対して住宅地であるという対比でこの部分を押さえようとしているのかなと感じたところです。

そしてなお、左側で確認すべき「価値観」というところで見た時に、総合計画ですから近いところでいけば 10 年後、将来的に言えば例えば 50 年 100 年先のことを見る時にどうすることが必要なのかという中で、このことを確認する上ではこれまでの 10 年間並びに 50 年間、100 年間の仙台のまちなみ、まちづくりということを土台にして考えた時に、足りていながらもこれから伸ばしていこうとするものが１つの価値観であり、足りていなかった、本当は補わなければいけないけどもまだ補いきれていない課題と含めて価値として示していくことが必要なことなのかなと。そういったところの部分で確認していく重要な要素としてこの４点を一応示していただいていて、会長が何度もお話いただいた掛け算ということが非常に生かされてくるのかなというふうな思いがいたしました。やはり伸ばすべきことを伸ばしていく。

そしてあくまでも総合計画ですから、その時の 10 年後をばさっと切るというよりは、10 年後から先に向かってのｉｎｇで考えていかなくてはいけない。人の育ちから考えても今学生を見た時に、今の学生をここに論じているのではなくて、10 年後の学生を論じた時に今の小学生なわけです。東日本大震災ということを考えても、東日本大震災を経験して

いない子どもたちが今小学校に入学していることを考えれば、それを元にしてこれから先をどう見据えていくかというところで、みんなで希望豊かなこの仙台のまちを描いていきましょうというところが、計画を見た瞬間に、さすが仙台だなと思っていただけるぐらいの、夢あふれると共に、現実味をしっかりと踏まえた計画であるということが論じられるように示していければいいのだなということを先ほどまでの議論を伺いながら感じたところです。当然その先に私だったらどうするかってことについてはまだ模索中ですので、今日はその辺りで勘弁させていただきたいと思いますけれども、そういった感じたところをまずお示しをさせていただきました。

○奥村誠会長

舟引委員さん。

○舟引敏明委員

仙台市、仙台都市圏という言い方をしましたけど、仙台市だけで完結して、実は経済が動いているわけではないのです。国道４号線にしろ、宮城大学の下の交差点でも、朝の８時頃は外に出ていく車で渋滞して入ってくる車は意外にスムーズ。みんなサイエンスパークだとか北部工業団地の方に向かう車がたくさん。交通の面で言うと、仙台空港はそもそも仙台の外ですし、仙台に来たお客さんを連れて行くといったら松島に行ったり蔵王に行ったりするわけです。これはお互いに周辺の地域、周辺の自治体と支え合っているところなのですが、そことの交流とか連携とかいうもの、役割分担といってもいいのかも知れませんけども、そういのもやはり計画の中の【横断的事項】なのか、それとも「活力還流」なのか分かりませんけども、そんな視点で周辺と連携協調してもっと盛り上げていくというような視点もあるのではないだろうかというふうに思います。

○奥村誠会長

庄子委員さん。

○庄子真岐委員

今のところに通じるところだと思うのですけれども、「活力還流」という表現がしっくりこないところがあります。「還流」というと仙台で育てて戻すというだけのようなイメージがあるので、「活力循環」なのか「循環拡大」なのか、一緒に発展していきましょうみたいなところが入ってくるといいのかなというふうに思いました。

「立地環境（東北の玄関口・首都圏からの近さ）」とあるのですけど、東北全体で見たら首都圏には福島の方が近いので「立地環境」という表現はあまりふさわしくないのかなと思います。この機能として中枢都市であるというところですので、「東北の玄関口としての誇り」みたいなところが視点としてあればいいのではないかというふうに思いました。

○奥村誠会長

竹川委員さん。

○竹川隆司委員

「都市像」のところ、「集う」というのも「起こす人」というのも、私がこの前発言し、議事録に残ってしまっていることなので少し補足します。資料４にありますが、私は「日本一集う、起こす人がつくる日本一住みやすいまち」ということを言ったのです。「日本一集う、起こす人」というのは、先ほどまさに岩間委員さんが言った、日本一地域の、社会のために考えている人が多い、そういうチャレンジャーが多いまちであってという認識であって、それが仙台の特徴ではないかなと思っていて、その人たちがあくまで自分たちが主体として住みやすいまちをつくるのだという意思を込めてそういう書き方にさせていただいておりました。これはあくまでこの前の話なのでたたきということで全然構わないのですけども、ポイントとしては、１つは日本一地域社会のためにという人が多いというのはこのまちの誇りなのだということと、また、主体はあくまでも地域の人たちがつくるのだというところが、私個人的には重要と捉え、「都市像」のところで話をさせていただいたということだけ、先に共有だけさせていただきます。

○奥村誠会長

遠藤智栄委員さん。

○遠藤智栄委員

皆さんのご発言の中にもあったのですけれども、「学び」の「若者の社会参画」のところは、私も「子ども・若者の地域社会参画」みたいな表現か。「若者の社会参画」だとだいぶ絞られるかなという、先ほどおっしゃっていたようなところと一緒です。

また、「都市像」のところ、案を増やしてしまって申し訳ないのですけども、皆さんのお話を聞いていて、例えばですけども「やさしさとアクションが豊かなまち」とか、その「やさしい」と「アクション」と相反するようでも一緒の部分もあるなと思って考えてみました。

ところで、今回のこの表の中には入っていないのですけれども、総合計画がどのような構成でできるかが今は全く分からないので、今のうちに話しておきますが、最終年度を迎える今の総合計画ですと「市役所の自己変革」というところがあったので、そういった部分は是非入れていただけたらいいということです。それは資料として今回出されている市民の方に参加していただいた未来づくりのイベントの時、連携が大事だという言葉がかなりたくさん出てきているのです。私は行政の方の仕事の１つにいろいろな方々をつなぐということがあり、それは実はとても大事な仕事ではないかなと思っています。町内でも横の連携をして、地域の中でも横の連携を、つながりをさらにつくっていただく。行政の皆さんも縦割りになりがちなところをどうにか、市役所の中でもそういった横軸を通していくこと、さらに変革していただけたらなと思いました。ですので、そういった点ではこの総合計画も少し骨格が見えてくる前からがいいのか分からないですが、見えてきた辺りにでも、今後のこの総合計画を担う職員さんたちで是非ディスカッションをしていただけたらなというふうに思いました。そういう意味でイベントのまとめのところの 14 ページに

も、「お金を出さずに知恵を出す仙台市になってほしい」と書いてあるのです。お金も出していただきたいのですけども。要するに知恵を、後は制度面とか。そういう意味で知恵をこう出してほしいということだと思います。制度を変えたり、制度をつくったり、お金以外のこともということだと思いますので、その辺も今後どういう構成になるか分かりませんが、話しておきたいと思いました。

○奥村誠会長

榊原委員さん。

○榊原進委員

【横断的事項（横串）】と書いてあるのですけど、これはたぶん「掛け合わせ事項」ですね。分野横断でなく分野掛け合わせて相乗効果を高めていきましょうということです。ただ、行政組織内部だけの横断的なことでは限界があるなということをひしひしと感じています。行政、民間企業、地域･市民含めて３つのセクターを超えた横断、掛け合わせということも含めて分野だけでない部分も意識できる言葉が必要です。

「都市像」についてです。先ほど望ましい市民像とありましたが、市民の気質みたいなことがあるかなと思っています。「江戸っ子」とか「浪速っ子」とか市民の気質を表現する「○○っ子」があるように、「仙台っ子」という言語化できないのですけど、岩間委員がおっしゃっていたような話とか、竹川委員がおっしゃっているチャレンジ精神みたいな「仙台っ子気質」を定義付けして、市民だけではなくてそういう気質を持った人が仙台市に来てくれるといいなみたいなというのがあるといいかなと思います。ですから、「都市像」については、そういう人を育む都市が「杜の都・仙台」なのだ、みたいなのはどうかと考え、前回の総合計画を見ると「ひとが輝く杜の都・仙台」なのですね。だから「仙台っ子が輝く」なのか「仙台っ子を育む杜の都・仙台」なのか分かりませんけど、人に焦点をあてる感じがいいかなと思いました。

○奥村誠会長

小野寺委員さん。

○小野寺健委員

改めて「みんなのせんだい未来づくり市民意見一覧」をずっと見て、意外と「子ども」というキーワードが多いかなと思いました。市民意見の中でも多々見られます。これからのことだと思うのですが、「子ども」とは意外と地域に密着した生活者なのだなというのを再認識させていただいたので、「子どもの参画できるまちづくり」という概念を取り入れていくべきなのかなと。「価値観」としても大事にするべきなのかなというのを、この「みんなのせんだい未来づくり」、こんなに意見を出していただき、読ませていただいてそういった認識を持ちましたので、「子ども」という視点を是非大切にしていただきたいなというふうに思います。

○奥村誠会長

菊地委員さん。

○菊地崇良委員

「都市像」の話は何回かお話してきたので、それに付言してなのですが、生活者、「都市像」のもとにいろいろ下りてくるということで、４つあってそれにまた補足を付けていくのかなと思うのですけども。そうなった時に、そういうふうにしていくのでしたらしようがないかもしれないのだけど、先ほど言ったように都市のアイデンティティーというか、そういったものを、理想像を掲げましょうとなったら、「生活しやすいまち」とか、「誰にもやさしいまち」とは当たり前の話なので、こういうのはもう止めてしまった方がいいのではないかなと。いやどうしてもこの下にぶらさげるという区分でつくっていくってことなら許容するのですけども、そうではないならば当たり前のことをやめましょう。

そして先ほどから話をしている仙台らしさ、東北と一体となった仙台とか、あるいは緑を大事にして心やさしい人とかであればですね、やっぱり人を集める魅力と機能の話はいいかもしれないのだけど、例えば「杜」を大切にするとか、「杜」と共生するとか言葉を入れて、その「杜」とは何ぞや、と。「杜」とは資源である森林であり、同時に歴史であり、あるいはそこで培われた風土であり、人を育てる気風でありとかって、そういうふうに定義して、その「都市像」の「杜」の中にいろんな意味を込めてですね、掲げていくと仙台市が大事にしている「杜」というのも生きてくるのだと思いますし、分かりやすいのではないでしょうか。10 年間、あるいはその先もです。今までもやもやしていたけれども確立していく、市民像も含めてその中に萌芽ができるのではないかと思います。これが１つです。

それから小野寺委員からありましたけど、我が国の強みとは何か、資源もないのに、我が国の強みとは何かというと「人材」なのですね。世界の大学ランキングとか、あるいはＩＴ普及率が実は世界で最下位、大学は上の方なのでしょうけど、そういう普及率などは最下位にいながらも、しかし、未だに世界で経済、ＧＤＰは上の方にいます。やはり人なのですね。世界基準とはまた別に日本人の素晴らしさ、この日本、この人、この地域の人の素晴らしさがあります。人をつくること、人づくり、人を集めること、これもやっぱり日本もだし、東北もだと思っているのです。そういうのが「都市像」の中に、僕は入ってきてほしいと思います。ただ全体の冊子のつくりの中で、先ほど言ったように区分ごとにぶら下げなければいけないから、違うのですよというのでしたら、それは今後の整理の中でまたご検討いただきたいと思います。

それから、先ほど「安全・安心」の話をしました。「安全・安心」は僕はやはり外せないと思っているので、「⑫防災環境都市」という「キーワード」は、もしかしたら「安全安心・防災環境都市」とか、そういうふうにして外してはいけないと思うので、この辺に収めたらどうでしょうか。

○奥村誠会長

菅井委員さん。

○菅井茂委員

今のご発言とつながってくるかと思うのですが、最初に出た「心と命を守る」というようなことを入れてほしいという話がありましたけど、そう思います。ただ、直接入れるのかどうかと。防災で「安心・安全」というご発言がありましたけど、防災ばかりではないですね、「安全・安心」は。学校だって安全な学校であってほしい。そういうことで是非膨らませた形で、ここの「都市像」に入れてもらえたらなと。

今、仙台のイメージが悪い。仙台に行ったらいじめられるから、仙台に転勤になったらお父さんだけ行ってよ。そういうような都市というふうにイメージされているのです。あちらこちらに行くと、「仙台は大変なのですね」と言われ、それが出てくる。これから 10 年間はそういうようなイメージを払拭するような形でいかなくてはならないでしょう。そういう点では最初に出たような、本当に「心と命を守る」というようなことがどこかに入ってほしいなと。そして今言ったような「安全・安心」につないでもらえることを願います。

○奥村誠会長

飯島委員さん。

○飯島淳子委員

市民像を掲げるべきだというご意見につきまして、私は若干慎重に考えております。憲法学でも個人像を想定するかという議論はありますが、自己決定権の問題にとどまらず、排除にもつながりかねないのではないか。法人は別かもしれませんが、生身の人間を想定して市民像を想定することについては、この意味で懸念があります。

加えまして、関係人口とか交流人口、あるいは自治基本条例でも準住民が重要視されてきている中で、確かに「住民」については緩やかに捉えるということではあったかと存じますが、仙台市に住んでいる住民、さらには住んでほしい人の「像」を、行政機関である審議会が掲げることについては、若干躊躇しております。

○奥村誠会長

岩間委員さん。

○岩間友希委員

「都市像」のところですが、「人を集める魅力と機能」というのも大事な要素なのではないかと思っています。仙台の規模になると、「人を集める魅力と機能」を持ちながら「共生や助け合い」もしているという２つぐらいの要素が両立できているのが都市としての魅力なのではないか。それを目指すぐらいの都市のポテンシャルを持っているのではないかというふうに思っています。社会的弱者をきちんと都市として守る機能も持っているし、その上で風土と共生する魅力もあるとか、それを目指していますということが掛け合わされていると、目標として頑張れるというか、いい夢になるのではないかなというふうに思

いました。

○奥村誠会長

手が挙がっていませんか。結構盛り上がってきたかな。言い忘れたという方はいませんか。

私があまりここでとやかく言ってはいけませんが、本当は「人が入った杜」みたいなものが、皆さんの実は共通のイメージなのでしょうか。ゆりかごとは言わないのだけど、何かほやっと、それぞれの人が安心しながらも、いろいろ自分のやりたいことができながら、周りの環境は大切にしながら、周りの人も見ながらというような。何かそういう、新しい「杜の都」みたいなものが皆さんの共通のところにあるような感じがしてきているのですけれども。ただ「杜」と言ってしまったら「それは総合計画なのか」となりますので、そこのところについては引き続きご議論いただきたいと思っています。少し足りないところがあるかもしれないのですけども、今日はここまでにします。

今後のスケジュールですが、第１回審議会の時に全体のスケジュールを一度お話ししています。第５回の審議会で中間取りまとめです。あと２回で一区切りつけることになっています。区切りをつけるというのは何かの取りまとめ、フリーディスカッションではいけませんので、次回はこういう形の取りまとめ、成果物はこういう感じのものにしたいというものを示した上で審議をしていきたいと思っております。そこで本日の議論は踏まえながらも、中間取りまとめのイメージ案を事務局の方で用意していただいて、さらに議論を進めたいと思います。つきましては、その案がいろいろ出ましたけれども、たたき台は事務局と私の方とで相談してということを、ご一任いただければありがたいと思いますがよろしいでしょうか。

（了承）

はい。ありがとうございます。

（３）その他

○奥村誠会長

最後に委員の皆さんから何かございますか。

はい。榊原委員さん。

○榊原進委員

「部会」とおっしゃっていて、どんな部会が展開されるのか、今後の取りまとめの方向だと思うのですけど、会長か事務局からイメージあれば少し説明してほしい。

○奥村誠会長

どんなお考えかご説明いただけますか。

○松田政策企画課課長

部会につきましては、今まだこの場でこのような形でというふうにご説明できるほどの熟度はないのですけれども、いくつかの取り組みの視点なりが整理されると思いますので、それを何個か、何グループかに分けて、それぞれ 30 人の委員の皆さまも、２つなのか３つなのか、そこは会長ともご相談したいと思いますけれども、分かれてそれぞれのグループの方々が預かった複数の取り組みの視点についてクロスの意見ができるような場を設けられればいいのかなというふうに思っております。

○奥村誠会長

私のイメージは、真ん中に６つあるのだけれども、その中で２つずつなのか３つずつなのか分からないですけど、まずはそこのところに重点を置きながら、ほかの５つから持ってくるというような感じの議論をそれぞれ４つ、３つぐらいでやっていただいて、その掛け合わせのパターンみたいなものを、掘り起こしてもらいたいと思っているのです。

その時、人にとにかく重点を当てますという方もいていいし、いやいや地域の、まちの在り方とか、あるいは産業なのだというふうになるかも分からないので、得意技がそれぞれ違うと思いますが、そのような感じでいくつかのグループをつくりたい。ただ、今これで６つのグループにしますと決めたわけでも何でもなく、ベースになるのはこの辺の視点なのかなと思ってはおりますけども、もう少し準備に時間をください。事務局と議論します。よろしいですか。

３　閉会

○奥村誠会長

以上で議事終了ということでよろしいでしょうか。

では、事務局の方から。

○松田政策企画課課長

皆さま長時間のご審議ありがとうございました。事務局から２点ほどご連絡がございます。１つは次回の審議会の日程についてでございます。お手元の座席表の裏面に次回の日程について記載しております。ちなみに次回の第４回審議会は３月 26 日火曜日の 18 時から。場所は本日と同じ第一委員会室となります。よろしくお願いいたします。

２つ目はお帰りの際の建物の出口ですが、前回と同じく北側玄関をお通りください。よろしくお願いいたします。

○奥村誠会長

以上で本日の審議会は終了といたします。ありがとうございました。